

◆ 『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.31（2015年10月号）◆

秋深まる折、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。来る11月2日20世紀メディア研究所共催で「日中戦争とメディア—東アジア資料による新相」と題して国際シンポジウムが開催されます。早稲田大学3号館10F会議室にて10時開始です。シンポジウムのご案内は下記をご参照ください。20世紀メディア研究所代表の土屋礼子先生、NPO法人インテリジェンス研究所代表の山本武利先生、『Intelligence』編集委員の小林聡明先生をはじめ日・中・韓の研究者の発表があります。

<http://www.waseda.jp/prj-m20th/201511JCWarAndMedia1007edOL.pdf>

その後、年内は11月28日、12月26日に20世紀メディア研究会を開催予定です。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイはすでに四回目まで掲載しておりますが、お楽しみ頂いていますでしょうか。さて、このブログのエッセイの執筆希望者を購読会員の中から募りたいと思います。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第96回20世紀メディア研究会】（9月26日（土）午後3時～5時45分）

- ※ 清水篤（公益財団法人東京大学新聞社 常任理事）「初期帝大新聞の研究」資金源の解明、体育会系人脈からの変遷など、初期帝大新聞の歴史的な研究成果をお話しいただきました。
- ※ 中生勝美（桜美林大学人文学系）「第二次世界大戦中のミシガン大学：Japanese language school・OSS・Cat Project・East Asia Program」第二次世界大戦中のミシガン大学における日本研究のプログラムとインテリジェンスをめぐってお話しいただきました。
- ※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。
- 次回の20世紀メディア研究会は、11月28日（土）、河キョンジンさん、松岡昌和さん、小野耕世さんの報告を予定しております。引き続き12月26日、1月30日に研究会を予定しております。姉妹研究会に当たるNPO法人インテリジェンス研究所の第13回課報研究会は12月12日開催予定です。
研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著：船戸与一「満州国演義」】歴史小説家船戸与一畢生の作。満洲国に深く関わる四兄弟—奉天領事館を経て満洲国國務院外交部に籍を置いた長兄、大陸浪人の二男、関東軍将校の三男、満映勤務を経てインテリジェンス活動に従事する四男というこの敷島四兄弟の設定、どこかしら実在の長谷川四兄弟—谷譲次・牧逸馬・林不忘の三つのペンネームを駆使し「安重根」の作もある長男海太郎、フランスに遊んだ画家にして小説家の二男瀧二郎、満洲映画協会で甘粕正彦の死を看取った三男濬、満鉄調査部を経て満洲協和会に籍を置いた四男四郎の芸術家兄弟のことなど連想させる。「『満州国演義』読みましたか？」と、私がかつて長谷川兄弟について一冊の本を書いたことを記憶している方に時折尋ねられる。もちろん小説が事実より面白くなくては話にならないけれど、よく調べられていると舌をまく読者も多い大作である。

【コラム：シドニーにて】

9月30日から10月2日まで、シドニー大学で開催された *Wounds, Scars, and Healing: Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation* という戦後70周年を記念する国際学会に参加した。大変残念なことにドナルド・キーン氏の基調講演はビデオ・レターに替えられたが、他のキーノート・スピーカーであるテッサ＝モリス・スズキ氏をはじめ、ねじれつつ連続する歴史像を多角的に検証する実り多い学会だった。学会にあわせて公演された創作能「オッペンハイマー」は何より感銘深かった。311後、鉛のように心が重くなるばかりの巡礼は広島へ行けとのお告げに導かれて瀬戸内海を渡る。そこでは父を原爆で失った兄と妹、そして妄執に輪廻を繰り返すオッペンハイマーの霊に出会う。夢幻能の象徴の言葉と身体に、おもいがけず、現在を癒す力をみいだす。いつの日かこの作品が日本で、広島、長崎、福島で上演される日が来ることを願う。ところで、昨今は世界中どこに行っても、日本研究に金を出さない日本政府の現状を嘆く声が聞かれるようだが、オーストラリアは人口比で日本語学習者が最も多く、あいかわらず日本研究が盛んな地であるにもかかわらず、ここでも助成が手薄になりつつあるという。隣国ニュージーランドの大学では、日本語教育日本研究をやめて中国語教育中国研究の講座を設ければお金と人を出すという孔子学院の攻勢がはげしいとも。中長期的にみて教育研究こそソフトパワーにつながる効率の良い投資であるというのに。

[10月27日付 文責：川崎賢子]